

# 源氏物語論 その(一) 対偶律

## 目加田 さく を

(一)

源氏物語世界には、どうも、紫式部が、意識してそれを支配させていると思われるところの、幾何かの法則があるようである。今回は、その一について、それをかりに、対偶律と名づけて、少しく考えてみようと思う次第である。

源氏物語(玉葛巻)によれば、和歌の髓脳類が、男女を問わず当時の知識人の間に普及しており、それに対する批判も現れていた事がわかる。少くとも紫式部は、和歌の髓脳類が作歌上にもつ指導力の限界について指摘しているのである。此の当時行われた和歌髓脳類とはどの様なものであるかと言え、(A)歌論書、(B)作歌法指導書、(C)歌枕、歌語の字彙、(D)模範用例集、といったものの様である。それについては後述にゆずるとして、源氏物語玉葛の条を掲げるならば、

きてみればうらみられけり唐衣返しやりてむ袖を濡らして

という末摘花からきた歌に苦笑しながら源氏が言う。

(1) 「恥かしき君なり古代の歌詠みは唐衣袂濡るゝ託言こそ離れねなまろもその列ぞかし更に一筋に纏はれて今めきたる言の葉に動き給はぬこそ妬き事は又あれ人の中なる事を折節御前などの態とある歌詠みの中には円居離れぬ三文字ぞかし昔の懸想のをかしき挑みには徒人のといふ五文字を休め所に打置きて言の葉の続き便りある心地すべかめり」など笑ひ給ふ「万づの草紙歌枕よく案内知り見盡くしてその中の詞を取り出づるに詠みつきたる筋こそ強うは変らざるべけれ

(ロ) 常陸の親王の書き置き給へりける紙屋紙の草紙をこそ見よとておこせ給へりしか和歌の髓脳いと所狭う病去るべき所多かりしかばもとより後れたる方のいとゞなかなか動きすべくも見えざりしかばむづかしくて返してき能く案内知り給へる人の口つきにては目馴れてこそあれ」とてをかしく思いたる様ぞいとほしきや

(ハ) 上いと眞実まめやかにて「などで返し給ひけむ書き留めて姫君にも見せ奉り給ふべかりけるものを此処にも物の中なりしも虫皆損ひてければ見ぬ人はた心殊にこそは遠かりけれ」と宣ふ

(ニ) 「姫君の御学問にいと用無からむすべて女は立てて好める事設けて染みぬるは様よからぬ事なり何事もいとつきなからむは口惜しからむ唯心の筋を漂はしからず持て鎮め掟なだらかて平穩なだらかならむのみなむ目易かるべかりける」など宣ひて……(岩波文庫本による)

右の条について次の事が考えられると思う。

(1) 髓脳は作歌上、実際は大して役に立たぬ事、熟読し遵奉しすぎては、末摘花の歌の如き陳腐な詠歌しか出れない者もある事。(イ)(ロ)

(2) 常陸宮(末摘花の父)が紙屋紙の草紙に自筆で認めおいた和歌髓脳があった事。末摘花はそれを源氏に読ませようとして貸し与えた。(ロ)

(3) 和歌の髓脳は、「理想的女性」をめざして教育される姫君にとつては必讀書であると当時考えられていた事。実際、詠歌心得として教養ある人々、姫君達——紫上、末摘花——の手許に愛蔵され、読まれていた事。これを読まないでは詠歌の心得に欠くところがあると考えられていた。(イ)

(4) 髓脳類を否定する光君は、実に髓脳を知悉した上で、その効用の存外薄い事を指摘したものである事。下手に遵奉してはならぬといっているものである事。従って、作者紫式部は、各種の和歌髓脳について造詣深かつた、その上で、自信満々と、その批判を作中人物に行わしめていると考えざるをえないのである。

### (二)

本朝において、和歌髓脳類の嚆矢は、歌経標式である。久松潜一博士は(日本歌論史の研究)

140頁 私に恐らく歌経といふ言葉の意味は具体的に万葉集を指したものでないかと考へるのである。即ち当時詩経に対して歌の經典としての万葉集を歌経といったのであろう。そしてこの歌経としての万葉集の様々な基準を示そうとしたのが歌経標式であると思ふ

146頁 奈良時代の末には六朝詩学がかなり多く日本に入ってきた。万葉集もこれらの影響なり教へなりをうけていると思はれる。そしてこれらを参考にしながら万葉集の基準となるものを作ってみようといふ意識から浜成によって宝龜三年に歌経標式が出来た。……六朝の詩学が文選の基準を示す為に作られた様に万葉の基準を示す為に歌経標式が作られたといふことは十分あり得ることである。と指摘された様に、歌経標式をはじめとして爾来和歌髓脳

類は、直接間接に、中国詩学、詩論の模倣乃至影響下に成ったものである。従つて、その所論は、和歌にはあてはまらぬものが多かったのである。詩病を模倣して作りあげた歌病の論は、紫式部ではないが、無意味で、姫君方の歌作の勉強上あまり参考にならぬものが多かったのである。一例をあげよう。歌経標式で和歌七病第二の胸尾、第一句終字与第二三六字等同字也の失として

神風之伊勢能。俱爾爾母阿羅麻之呼  
をあげ、得の句として

宇治何婆呼。不禰和他是呼等

をあげる如き、無意味という以上に不当である。

さて歌経標式は、左の歌病論と歌体論とから成るのである。

歌病略有七種として

頭尾・胸尾・腰尾・鬢子・遊風・同音韻・遍身

歌体は

一、求韻 (二)

長歌 短歌

鹿韻 細韻

二、查体 (七)

離会 猿尾 無頭有尾 列尾 直語 離歌

三、雜体 (十)

聚蝶 譴警 双本 短歌 長歌 頭古腰新 頭新腰

古 古頭古腰 古事意 新意体

これをみると、その名称をはじめとして中国詩学の模倣の跡が歴然としている。四声を有する漢字に依拠する中国の詩は、音韻上の効果を甚しく狙うものであるから、詩の音韻論上の法則は精緻を極め重要なものとなっている。それを、本来音韻にきびしくない国語に依拠する和歌を律する法則を制作する際に模倣しても、当を得ない事もとよりである筈である。しかるに、歌経標式以来の和歌髓脳類は、中国から将来された中国詩学——日本国現在書目録によれば詩論、詩学関係書は

文心彫龍十卷 劉勰撰 注詩品三卷 翰苑卅卷 文府十卷

文府十二卷 文府二卷 語麗十一卷 朱澹撰 秀句集一卷

(辭賦) 詞苑麗則集廿卷 康明撰 古今詩人秀句 元思敬撰 詩苑英十卷

続古今詩苑英華集十卷

等があげられる。此の外夥しく将来された詩経・文選・楚辞等の音義類もこれに入れらるべきであろう。又正倉院文書中に文軌の存する事を久松博士は指摘されている——、文鏡秘府論を通じて間接に中国詩論の影響、示唆をうけて歌論なるものをうちたてたのである。久松博士の日本歌論史(52頁以下)には文鏡秘府論・歌経標式・道济十体・定家十体を一覧表にして比較され、本邦歌論は、

「文鏡秘府論等の詩学の分類論と詩病論とは歌経標式をはじめ日本に於ける歌の分類論や歌病論に影響してゐる事は明らかであり殊に音韻を基礎にした分類論や病の論はその詩に於ける音性律や音位律的立場を余りにそのまゝに歌の上に用ゐ過ぎた嫌があるのであり、音数律を中心とする歌そのものの本質と異なつたものを見るのであるが、同時にその間に多少の日本化を行はうとしてゐるのである……」

秘府論を通してみられる支那詩学における分類や病の名称をそのまま用ゐたとも見られないのであつて支那詩学のそれを多少でも日本化しようとした傾向があるのである。この点は一面からみて歌経標式は文鏡秘府論の直接的影響をうけてなつたものではなく或ひは秘府論と独立してそれ以前になつたといふことを言ひ得る一の証でもあるが一般的に言へば日本の歌学、もしくは日本の文学批評が支那詩学の影響をうけながら多少とも日本化する、日本的な文学批評を生出してきた……日本の歌論の変遷の上からみると、詩学の日本化の傾向は時代のおくれるに従つて一層甚しくなるのである。」

さて、紫式部時代に行われていた所謂和歌髓脳類をあげるならば、凡そ次の如きものであろうか。

歌経標式 宝龜三年成立 藤原浜成

(喜撰式)

(孫姬式〔和歌式〕)

(石見女式〔石見女髓脳〕)

和歌十体 天慶八年十月成立

和歌十体

類聚証 天徳四年以後

新撰髓脳

九品和歌

和歌髓脳〔喜撰偽式〕

壬生忠峯

源道濟

藤原実頼

藤原公任

同

以上は中国詩学を模倣したものであるから、音韻による歌病・歌体論、さては模範歌・歌枕・歌語の手引といった様式のものである。

### (三)

さて、紫式部の学問の教授者であつた父藤為時が学んだ作詩心得といったものは、前掲本邦に将来の中国詩学書乃至文鏡秘府論そのものであつたか、その亜流の髓脳類——源順作文大体、新撰詩髓脳の如き——であつたか、それらを含めた多種類であつたか、今日となつては分明ではない。文章生出身の彼が、詩経・文選・白氏文集等に殊に造詣が深く、それが彼の作詩上の指導的役割を果している事、もとよりである。ここでは、彼の残された作品、殊に対偶の様態を虚心にながめてみようと思ふ次第である。

藤為時の作品の現存するものは、本朝麗藻十三首、和漢兼作集（本朝書籍目録では和漢兼作集二十卷とあれど現存本十卷）「七句」中四句、「二首」中一首を残り、類聚句題抄七首実は六首、新撰朗詠三首（イ本によれば四首）、江談抄一首、十訓抄一首（古事談同一首）計十八首でもあろうか。（付号、線は後述対偶論にかかわるものである。）

本朝麗藻（群本卷首欠、群本による）

七言。暮春侍宴左丞相東三條第同賦度水落花舞  
應製詩一首以輕為韻  
江匡衡

① 同前 藤為時

花前春暖鳳池清。落盡舞來度水程。分三岸粧奢風漸送。

上橋響動月相迎。飄超石瀨紅裙轉。散過波塘玉履輕。

此地猶應真勝地。宸遊再奏九韶聲。先年有臨此地。故獻此句。

（雨為水上絲）以浮為韻  
源伊賴

② 同前 藤為時

暮雨濛々池岸頭。更為水上亂絲浮。經從潭面霑難結。

曳自波心脆不留。細灑應爭漁浦藕。斜飛欲貫釣磯鉤。

誰知流下沈潛客。霜縷數莖夏裏秋。

夏日陪於員外端尹文亭同賦泉傳三萬歲詩一首以送為韻  
江以言

③ 同前 藤為時（山家部）

人年萬歲傳何處。一道飛泉遶石橋。漢主若知家主意。山聲定愧水聲遙。

（七言、九月盡日侍北野廣各分一字詩一首 高積善）

④ 同前 寒字 藤為時（神祇部）

時隨冠蓋認祠看。新樂鋒鏑古寒。非啻玄孫成盛集。九重天子促金鸞。

⑤ 海濱神祠住吉祠 藤為時（全）

晴沙岸上暮江干。鬱々林蘿陰社壇。應是神心嫌苦熱。浪聲松響夏中寒。

⑥ 題玉井山庄。在和泉園云々 藤為時（山莊部）

玉井佳名被世稱。松楹半接碧巖稜。山雲繞舍應褰幔。

潤月臨窓欲代燈。梅發寒花朝見雪。水收幽響夜知

水。池邊何物相尋到。雁作來賓鶴作朋。

⑦ 門閑无調客 藤為時（閑居部）

家舊門閑只長蓬。时无調客事條空。翟公去尉塵長息。袁

氏安貧雪不通。草舍闕生秋露白。苔封扉帶夕陽紅。

久忘倒履送迎禮。別作洛中泰適翁。

(和下高礼部再夢唐故白太保之作上。 中書王)

⑧ 同前 藤為時 (讚德部)

兩地聞名追慕多。遺文何日不謳歌。繁情長望遐方月。

入夢終踰万里波。露膽雖下隨天曉。隔上。風姿未下與影

圖一訛。我朝慕居易風跡。仲尼昔夢周公久。聖智莫言時

代過。

(夏日 同賦未飽風月思。深字 儀同三司)

⑨ 同前 藤為時 (詩部)

未飽多年詩思侵。清風朗月久沈吟。志隨日動何為足。

興遇晴牽豈厭心。班扇長襟秋不盡。楚臺餘味老弥深。

時人莫咲散樗吏。白髮緋衫獨尚淫。

⑩ 春日同賦閑居唯友詩。以心為韻 (同)

閑居希有故人尋。益友以詩興味深。苦嗜獨題如合志。

緩吟自聽便知音。思凝草木過連壁。義入風雲勝斷

金。若不形言兼杖醉。何因安慰沈心。

⑪ 觀謁之後以詩贈太宋客世羌昌藤為時 (贈答部)

六十客徒意態同。獨推羌氏作才雄。來儀遠動煙村外。

賓礼還慙水館中。畫鼓雷奔天不雨。彩旗雲聳地生風。芳

談日暮多殘緒。羨以詩篇子細通。

⑫ 重寄。

言語雖殊藻思同。才名其奈昔楊雄。更催鄉淚秋夢後。

暫慰編情一晚醉中。去國三年孤館月。歸程万里片帆風。

嬰兒生長母兄老。兩地何時意緒通。

⑬ 去年春。中書大王桃花閣命詩酒。左尚書。藤員外中

丞惟成。右菅中丞資忠。內史慶大夫保胤。共侍席。內

史在三大王屬文之始。以儒學侍。縱容尚矣。七八年來。

洛陽才子之論詩人者。謂三人為先鳴。當于其時。

或求道一乘。或告別九原。西園雪夜。東平花朝。莫

不閣筆廢吟。眷戀惆悵。廼者研精之餘。披覽去春之

作。其文爛然存。其人忽然去矣。遂製懷舊之瓊篇。忝

賜惟新之玉章。善以為朝墨之庸奴。藩邸之舊僕而已。

因之為時一讀腸斷。再詠淚落。偷抽短毫。敬押高

韻。藤為時 (懷旧部)

梁園今日宴遊筵。豈慮三儒減一年。風月英聲揮薤露。

幽閑遠思趣林泉。新詩切骨歌還濕。往事傷情覺似眠。

繁木昔聞摧折早。不才無益性靈全。

和漢兼作集 (現存本十卷春上中下,夏上下,秋) (珍書同好会本)

春上

⑭ 春遊原上

煙霞不記誰今主、楊柳猶傳是故城。

藤原為時七(句)二(首)

春中

殘鸞

春はまたのとききものをうくひすのかへるやまちにこころ  
まとふな

藤原為時

秋上

⑮ 嵯峨野秋望

林梢鴈陣穿秋霧。山脚人家帶夕陽。

藤原為時

⑯ 田家秋意

三巴峽月雲收白。七里灘波葉落紅。

藤原為時

秋下

九日

靈葉萸朱吳郡露。奇香菊白晉籬霜。

藤原為時

類聚句題抄(七首)六首

(風度請春意)  
(譜)

藤為時

① 花定開敷香遠送。鳥應撩亂韵斜過。

力微詩酒芳遊促。

声暖笙歌逸興多。

② (絃歌伴月來)

光應雙至寒彈韵。影漸相臨漫拍聲。  
入松遺曲帶花行。

藤為時

(林晚鳥爭樹)

③ 蘆浦波幽花未白。桂林露宿葉無紅。  
鴈恨遲傳遠寒風。

藤為時

(池清知雨晴)

④ 石潭風洗雲應去。碧水波平月漸沈。  
遠峯黛浸暮江心。

為時

(未飽風月思)

⑤ 志隨日動何為足。興遇時牽豈厭心。  
楚臺餘味老弥深。

為時

(旧遊安在哉)

⑥ 攜將長泣芒原露。尋到空看故宅苔。  
交談唯夢魂催。

為時

新撰朗詠

秋、嵯峨秋望

為時

踏<sup>テ</sup>露<sup>ラ</sup>路<sup>ハ</sup>迷<sup>フ</sup>紅葉<sup>ノ</sup>色<sup>シ</sup>  
A B C  
迎<sup>テ</sup>風<sup>ハ</sup>衣<sup>ヲ</sup>染<sup>ム</sup>紫<sup>ム</sup>蘭<sup>ノ</sup>香<sup>シ</sup>  
A B C

同

同

林<sup>ノ</sup>梢<sup>ヲ</sup>鴈<sup>ノ</sup>陣<sup>ヲ</sup>穿<sup>ク</sup>秋<sup>ノ</sup>露<sup>ニ</sup>  
A B C D  
山<sup>ノ</sup>脚<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>家<sup>ノ</sup>帯<sup>ニ</sup>夕<sup>ノ</sup>陽<sup>ニ</sup>  
A B C D

冬、雪 雪飛千里外

同

朝<sup>ニ</sup>塞<sup>ニ</sup>嘶<sup>ル</sup>花<sup>ニ</sup>遙<sup>ニ</sup>去<sup>ル</sup>馬<sup>ノ</sup>  
A B C D E F  
巴<sup>ノ</sup>山<sup>ノ</sup>歌<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>遠<sup>ニ</sup>行<sup>ク</sup>人<sup>ノ</sup>  
A B C D E F

イ本

斑扇長襟秋不盡 楚台餘味老弥深 以言 (イ本為時)

(類聚句題抄には為時とす)

江談抄

藤為時

三<sup>ノ</sup>巴<sup>ノ</sup>峽<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>雲<sup>ノ</sup>收<sup>ル</sup>白<sup>ク</sup>  
A B C D E F  
七<sup>ノ</sup>里<sup>ノ</sup>難<sup>シ</sup>波<sup>ノ</sup>葉<sup>ノ</sup>落<sup>ク</sup>紅<sup>ク</sup>  
A B C D E F

十訓抄

第十可庶幾才能事

一條御時越前国あきたりけるを源國守藤原為時共に申けるに御堂殿とり申されけるにや國守をなされにけり為時愁にたへず申文を女房に付て奉りける其詞

苦<sup>シ</sup>学<sup>ム</sup>冬<sup>ノ</sup>夜<sup>ニ</sup> 紅<sup>ク</sup>涙<sup>シ</sup>盈<sup>ル</sup>巾<sup>ヲ</sup> 除<sup>ク</sup>目<sup>ノ</sup>春<sup>ノ</sup>朝<sup>ニ</sup> 蒼<sup>ク</sup>天<sup>ノ</sup>在<sup>ル</sup>眼<sup>ニ</sup>  
A B C A B C

帝御覽じて供御もまいらず夜のおとどに入せ給て御心勞有

けるを御堂殿の参給て國守を改めて為時となされにけり  
古事談

第一王道后宮

一條院御宇。源國盛任<sup>ニ</sup>越前守<sup>一</sup>。其時。藤原為時附<sup>ニ</sup>於女房<sup>一</sup>獻<sup>レ</sup>書。其状云。

苦学寒夜 紅涙露<sup>レ</sup>袖 除目春朝 蒼天在<sup>レ</sup>眼云々

天皇覽<sup>レ</sup>之。敢不<sup>レ</sup>羞<sup>ニ</sup>御膳<sup>一</sup>。入<sup>ニ</sup>夜御帳<sup>一</sup>。涕泣而臥給。左<sup>道</sup>府参入。知<sup>ニ</sup>具如<sup>一</sup>此。忽召<sup>ニ</sup>國盛<sup>一</sup>。令<sup>レ</sup>進<sup>ニ</sup>辞<sup>一</sup>・書<sup>一</sup>。以<sup>ニ</sup>為時<sup>一</sup>令<sup>レ</sup>任<sup>ニ</sup>越前守<sup>一</sup>。國盛家中上下涕泣。國盛自<sup>レ</sup>此受<sup>レ</sup>病。及<sup>レ</sup>秋雖<sup>レ</sup>任<sup>ニ</sup>播磨<sup>一</sup>。猶依<sup>ニ</sup>此病<sup>一</sup>。遂以逝去云々

(四)

源氏物語引用の漢詩文は総数六十いくつに及ぶが、本朝のものでは菅家後草二、その他本邦人作は二、三を数えるにすぎない。その中白詩引用は約三十という圧倒的な頻度を示している。式部日記によれば、中宮彰子に文集を教えたる程白詩に習熟していた式部としては当然であろう。恐らく式部は白氏文集中の詩は長恨歌・琵琶行をはじめその著名な詩は悉く暗誦していたであろう。肉体を几帳の中にとじこめられた式部の詩精神は日夜自由自在に本朝の物語の世界と白氏文集の世界に往来していたものと想われ



る。従つて紫式部は、漢詩文——(經典の文句を含む)——就中、白詩、を自家菜籠中のものとして、作中登場人物に或は朗詠させ、(吟)印)、或は会話、或は地の文に援用して感懐を披搯させ情景を描写するのである。換言すれば漢詩文の文芸的効果を借りて源氏物語世界の雰囲気を創造しようとして先ず第一に概観すべきであるが、この事については一、二の例をあげるにとどめ、次に小論の目的とする第二の操作、その漢詩文・仏典の句をみると、その特徴として、甚しく華麗優美な対偶に富むという事実と、その様相の検証に及んでみようと思う。それは、白詩その他の華やかな対偶が、源氏物語世界の形成にどの様な影響力を与えたか、という事を考える為である。

「……勝れて時めき給ふありけり……世の例にもなりぬべき御もてなしなり……いとまばゆき人の御おぼえなり唐土にも斯かる事の起りにこそ世も乱れ悪しかりけれとやうやう天の下にもあぢきなう人の持て悩み種になりて楊貴妃の例も引き出でつべうなりゆくに」 桐壺

先ず桐壺巻冒頭からして長恨歌の主題に負う事を明言する。用例一、二、三、四、五、六、を見ればその一節一節を抽出する事により長恨歌全体に及んでいる事が一層明らかになる。玄宗皇帝と楊貴妃の悲恋を詠じた長恨歌の甘美にして憂愁に富む世界は、そのまま本朝に移入され

て、

「この頃明蓉御覽する長恨歌の御絵、亭子院の畫かせ給ひて伊勢貫之に詠ませ給へる大和言葉をも唐土の詩も唯その筋をぞ枕言にせさせ給ふ」 桐壺

長恨歌の盛行は詩として読むにとどまらず、長恨歌絵巻まで出現し、貴紳淑女の間に流行の果は、亭子院直筆の絵に、これを詠じた伊勢貫之といった当代一流歌人の歌までそえられたものまでが現れるにいたつた。——その絵巻を日夜披見し、長恨歌の世界に自己を没入している桐壺帝という設定である。

長恨歌(玄宗と楊貴妃)と対比させつつ桐壺帝と桐壺更衣の悲恋の世界を造形したのである。

(a) かの贈物御覽せさす亡き人の住処尋ねいでたりけむ徴の釵ならましかばと思ほすもいと甲斐なし

尋ねゆく幻もがな伝にても魂の在所をそこと知るべく絵にかける楊貴妃の容貌はいみじき画師といへども筆限りありければいと匂なし太液の芙蓉未央の柳もげに通ひたりし容貌を唐めいたる粧ひはうるはしうこそ有

(b) けめ 懐しうらうたげなりしを思し出づるに花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき

(c) 五、(7) 燈火を挑げ尽くして起きおはします右近の司の宿直奏の声聞ゆるは丑になりぬるなるべし……明

くるも知らずと思し出づるにもなほ朝政は怠らせ給ひぬべかんめり。

(a) 長恨歌・漢皇実は玄宗は楊貴妃に死別したが、方士をして彼女の魂魄の往生した仙界を訪れさせ、太眞現に愛用の釵と鈿合の一かけ一ひらづつを貰うけてこれを手にする事が出来た。——彼はまさされり。しかるに桐壺帝は命婦が母北方から生前使った御髪あげの調度（櫛など）をかづけられたのを手にして昔をなつかしむのみ。——我劣れり。

(b) ① 絵だから厳密にはいえぬが貴妃の絵は匂う様な美しさに乏し。——彼劣れり。

② 端麗な美である。——源氏物語では女性美の様式としてはあまり好まれない様式の美、——彼劣れり、といえぬ事はない。

③ 懐しうらうたげ——なる美は、源氏物語世界の女性美としては最も好まれる様式の美、——我優れり。

④ 彼が、太液の芙蓉未央宮の柳と形容するなら此方は、花の色や鳥の音と形容しよう。

⑤ ところが、彼は芙蓉や柳に形容出来たかかもしれぬが、此方は、どの花、どの鳥の色や音をもってしても到底形容出来ない程の美しさであった。

⑥ 長恨歌では楊貴妃と共寝の故に「日高起」、ために、朝政を怠った。——彼は幸せである。まされり。

桐壺帝は更衣の死を悲しむあまりねむれずに曉方になって眠るために朝政を怠る——我は悲しく、劣れり。  
⑦ 劣れり。——彼私全く同じ。

と対比すれば各々対照的なのところもあるが、要するに玄宗にとっての貴妃、桐壺帝にとっての更衣は同じ様に此世に又とない大切なものであった。

### ○ 長恨歌

白居易

(一)  
漢皇重色思傾國、御宇多年求不得  
楊家有女初長成、養在深閨人未識  
天生麗質難自棄、一朝選在君王側  
回眸一笑百媚生、六宮粉黛無顏色  
春寒賜浴華清池、溫泉水滑洗凝脂  
侍兒扶起嬌無力、始是新承恩澤時  
雲鬢花顏金步搖、芙蓉帳暖度春宵

春宵苦短日高起(五) 從是君王不早朝

承歡侍宴無閒暇 春從春遊夜專夜

後宮佳麗三千人 三千寵愛在一身

金屋粧成嬌侍夜 玉樓宴罷醉和春

姊妹弟兄皆列土 可憐光彩生門戶

遂令天下父母心 不重生男重生女

驪宮高處入青雲 仙樂風飄處處聞

緩歌慢舞凝絲竹 盡日君王看不足

漁陽鼙鼓動地來 驚破霓裳羽衣曲

九重城闕煙塵生 千乘萬騎西南行

翠華搖搖行復止 西出都門百餘里

六軍不發無奈何 宛轉蛾眉馬前死

花鈿委地人無收 翠翹金雀玉搔頭

君王掩面救不得 回看血淚相和流

黃埃散漫風蕭索 雲棧縈紆登劍閣

峨嵋山下少人行 旌旗無光日色薄

蜀江水碧蜀山青 聖主朝朝暮暮情

行宮見月傷心色 夜雨聞鈴腸斷聲

天旋日轉回龍馭 到此躊躇不能去

馬嵬坡下泥土中 不見玉顏空死處

君臣相顧盡沾衣 東望都門信馬歸

歸來池苑皆依舊 太液芙蓉未央柳

芙蓉如面柳如眉 對此如何不淚垂

春風桃李花開後 秋雨梧桐葉落時

西宮南苑多秋草 宮葉滿階紅不掃

梨園弟子白髮新 椒房阿監青娥老

夕殿螢飛思悄然 孤燈挑盡未成眠

遲遲鐘鼓初長夜 耿耿星河欲曙天

鴛鴦瓦冷霜華重 翡翠衾寒誰與共

悠悠生死別經年 魂魄不曾來入夢

臨邛道士鴻都客 能以精誠致魂魄

為感君王展轉思 遂教方士殷勤覓

排空馭氣奔如電 昇天入地求之偏

上窮碧落下黃泉 兩處茫茫皆不見

●碧と

中有二人字太真 雪膚花貌參差是

金闕西廂叩玉肩 轉教小玉報双成

聞道漢家天子使 九華帳裏夢魂驚

攬衣推枕起徘徊 珠箔銀屏迤邐開

雲鬢半偏新睡覺 花冠不整下堂來

風吹仙袂飄飄舉 猶似霓裳羽衣舞

玉容寂寞淚闌干 梨花一枝春帶雨

含情凝睇謝君王 一別音容兩渺茫

昭陽殿裡恩愛絕 蓬萊宮中日月長

回頭下望人寰處 不見長安見塵霧

唯將舊物表深情 鈿合金釵寄將去

釵留一設合一扇 釵擘黃金合分鈿

但令心似金鈿堅 天上人間會相見

臨別殷勤重寄詞 詞中有誓兩心知

七月七日長生殿 夜半無人私語時

在天願作比翼鳥 在地願為連理枝

天長地久有時盡 此恨綿綿無絕期

○金 西 秋 白

(七)(夕)

梟鳴松桂枝。狐藏蘭菊叢

白凶宅

(吟)(八)(夕)

八月九月正長夜。千声万声無止時

白聞夜姑

(九)(末)

伯牙善鼓琴。鍾子期善聽……子期死。伯牙絕絃以無  
知音者

列子

(吟)(十)(末)

夜深煙火盡。霰雪白紛々。幼者形不蔽老者体無溫。悲  
喘與寒氣。併入鼻中辛

白秦中吟十首

(吟)(十一)(紅)

「桂殿迎初歲、桐棲媚早生、煎花梅樹下、蝶鸞畫梁  
迎」

青海波詠·小野篁

(十二)(紅)

夜泊鸚鵡州。秋江月澄徹。隣船有歌者。發調堪愁  
絕。歌罷繼以泣。泣声通復咽。尋声見其人。有婦顏  
如雪。独倚帆檣立。娉婷十七八。夜淚似眞珠。双  
双墮明月。借問誰家婦。歌泣何悽切。一問一露襟。

低眉終不說

夜聞歌者。宿鄂州。白

(吟)(十三)(葵)

瘦令樓中初見時。武昌春柳似腰支。相逢相失兩如夢。為雨為雲今不知。

有所嗟  
劉夢得

(十四)(葵)

昔者先王嘗游高唐。怠而昼寢。夢見一婦人。曰妾巫山之女也。為高唐之客。聞君游高唐。願薦枕席。王因幸之。去而辭曰。妾在巫山之陽高丘之岨。旦為朝雲。暮為行雨。朝々暮々陽台之下。旦朝視之如言。

高唐賦  
宋玉

(十五)(葵)

鴛鴦瓦冷霜華重。旧枕故衾誰與共。

(十六)(賢木)

呂后最怨戚夫人及其子趙王。因太后遂斷戚夫人手足。去眼輝耳飲瘖藥。使居廁中。曰人彘。

呂后本紀  
(史記)

(十七)(賢)

光明遍照十方世界。念佛衆生攝取不捨

觀無量壽經

(十八)(須磨)

十一月中長至夜。三千里外遠行人。若宿楊梅館。冷枕單牀一病身。

冬至宿楊梅館  
白

(吟)(十九)(須)

三五夜中新月色。三千里外故人心。

八月十五日夜禁中獨直  
對月憶元九  
白

(吟)(二十)(須)

去年今夜侍清涼。秋思詩篇獨斷腸。恩賜御衣今在此。捧持每日拜餘香。

菅家後章

(吟)(二十一)(須)

馭長莫驚時更改。一榮一落是春秋。

菅家

(二十二)(須)

翠黛紅顏錦繡粧。泣尋沙塞出家鄉。辺風吹斷秋心緒。隴水流添夜淚行。胡角一聲霜後夢。漢宮万里月前腸。

昭君若贈<sub>二</sub>黃金賂<sub>一</sub>。定是終<sub>レ</sub>身奉<sub>二</sub>帝王<sub>一</sub>。

朗詠集 王昭君

大江朝綱

(二十三)(須)

向<sub>レ</sub>曉簾頭生<sub>二</sub>白露<sub>一</sub>。終宵床底見<sub>二</sub>青天<sub>一</sub>。

朗詠集、故宮、屋舍壞  
三善宰相

(吟)(二十四)(須)

● 莫發桂芳半具<sub>レ</sub>圓。三千世界一周天。天迥玄鹽雲將<sub>レ</sub>霽。

只是西行不<sub>二</sub>左遷<sub>一</sub>。

菅家後章

(吟)(二十五)(須)

往事眇茫都似<sub>レ</sub>夢。旧遊零落半歸<sub>レ</sub>泉。醉悲灑<sub>レ</sub>淚春盃裏。

吟苦支<sub>レ</sub>頭曉燭前。

十年三月三十日。別<sub>二</sub>徽之於<sub>二</sub>澧上<sub>一</sub>。

十四年三月十一日夜。云々 白

(詞)(二十六)(須)

● △ 胡馬依<sub>二</sub>北風<sub>一</sub>。越鳥巢<sub>二</sub>南枝<sub>一</sub>。

● △

文選古詩

(詞)(二十七)(明)

琵琶行(白詩)を指すもの

……醉不<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>歡慘將<sub>レ</sub>別。別時茫茫江浸<sub>レ</sub>月。……千呼万

喚始出来……今年歡笑復明年。秋月春風等閑度。弟走

從<sub>レ</sub>軍阿姨死。暮去朝來顏色故。門前零落鞍馬稀。老大

嫁作<sub>二</sub>商人婦<sub>一</sub>。商人重<sub>レ</sub>利輕<sub>二</sub>別離<sub>一</sub>。前月浮梁買<sub>レ</sub>茶去。

去來江口守<sub>二</sub>空船<sub>一</sub>。遊<sub>レ</sub>船明月江水寒。夜深忽夢少年

事。夢啼粧淚紅闌干。我聞<sub>二</sub>琵琶<sub>一</sub>已歎息。又聞<sub>二</sub>此語<sub>一</sub>重

啣々。同是天涯淪落人。相逢何必曾相識。我從<sub>二</sub>去年辭<sub>二</sub>帝

京<sub>一</sub>。謫居臥<sub>レ</sub>病潯陽城。潯陽地僻無<sub>二</sub>音樂<sub>一</sub>。終歲不<sub>レ</sub>聞<sub>二</sub>

絲竹聲<sub>一</sub>。……春江花朝秋月夜。往往取<sub>レ</sub>酒還獨傾。豈無

山歌與村笛。今夜君聞琵琶語。如<sub>レ</sub>聞<sub>二</sub>仙樂<sub>一</sub>耳暫明。莫<sub>レ</sub>

辭更坐彈<sub>二</sub>一曲<sub>一</sub>。為<sub>レ</sub>君翻作<sub>二</sub>琵琶行<sub>一</sub>。感<sub>二</sub>我此言<sub>一</sub>良久

立。却坐促<sub>レ</sub>絃絃轉<sub>レ</sub>急。淒淒不<sub>レ</sub>似向前聲。滿座重聞皆

掩泣。座中泣下誰最多。江州司馬青衫濕。

白

琵琶行

右には詩句上種々の対偶がみられる外、人物配置上、即ち構成上の対偶、つまり同是天涯淪落人である妓女と作者の生涯が、華麗な花の凋れる過程と病弱不遇の身は枯れかかった深山木の如く、対比として至妙である。潯陽江は茫茫として月影を浸し、船中老妓の奏する琵琶の響きは淒淒

きわまり司馬は袖をしとどにぬらしてきゝ入るといふ結びである。

(詞)(二十八)(蓬生)

三徑就<sub>レ</sub>荒。松菊猶存。

歸去來 陶淵明

(吟)(二十九)(乙女)

落葉俟<sub>ニ</sub>微颺<sub>一</sub>以隕。而風之力蓋寡。孟嘗遭<sub>ニ</sub>雍門<sub>一</sub>而泣。

琴之感以末。何者欲<sub>レ</sub>隕葉無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>假<sub>ニ</sub>烈風<sub>一</sub>。將<sub>レ</sub>隕之泣不<sub>レ</sub>

足<sub>レ</sub>繁<sub>ニ</sub>衰響<sub>一</sub>也。

豪士賦  
陸士衡

乙女

因に同卷にあつては和漢朗詠集秋興(義孝集)より

秋は猶夕まぐれこそたゞならね荻の上風萩の下露

の歌を引歌として用いている。これはABCの付号の如

く、漢詩的対偶の技巧をもつものである。

(吟)(三十)(玉菟)

涼原郷井不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>見。胡地妻兒虚棄捐。

縛戎人  
白

(三十一)(胡蝶)

眼穿不<sub>レ</sub>見<sub>ニ</sub>蓬萊島<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>見<sub>ニ</sub>蓬萊<sub>一</sub>不<sub>ニ</sub>敢<sub>レ</sub>歸<sub>一</sub>。童男<sub>レ</sub>艸<sub>レ</sub>女舟

中老。徐福文成多<sub>ニ</sub>誑誕<sub>一</sub>。

海漫漫  
白

(三十二)(胡蝶)

四月天氣和且清。綠槐陰合沙提平。

贈<sub>ニ</sub>駕部吳郎中七兄<sub>一</sub>  
白

(三十三)(行幸)

陷<sub>ニ</sub>堅庭<sub>一</sub>而陷<sub>レ</sub>股。若<sub>ニ</sub>沫雪<sub>一</sub>以蹴散。

日本書紀

(吟)(三十四)(若菜上)

子城陰處猶殘雪。衙鼓聲前未<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>塵。

度樓曉望  
白

(三十五)(若菜下)

楚有<sub>ニ</sub>養由基<sub>一</sub>。善<sub>レ</sub>射者也。去<sub>ニ</sub>柳葉<sub>一</sub>百步射<sub>レ</sub>之。百發而

百中之

史記周本紀

(三十六)(若菜下)

白雪花繁空拂<sub>レ</sub>地。綠絲枝弱不<sub>レ</sub>勝<sub>レ</sub>鶯。

楊柳枝詩八首  
白

(若菜下)(花鳥)

樂書曰。師文之變易寒暑。孫登之感動風雪云々

謂琴事也。琴書曰。師曠晉樂官也。上於琴能易寒暑。

占風雨。為晉平公鼓之。感玄鶴六下舞。

(三十七)(若菜下)

春女感陽氣而思男。秋士感陰氣而思女。

毛詩箋云、  
幽風七月

(吟)(三十八)(柏木)

五十八翁方有後。静思堪喜亦堪嗟。一珠甚小還慙

蚌。八子雖多不羨鴉。秋月晚生丹桂實。春風新長紫

蘭芽。持杯祝願無他語。慎勿頑愚似汝爺。

右は

宮はさしもおぼし分かず人はたしらぬことなればたゞ一  
所の御心のうちにのみぞ『あはれはかなかりける人の契  
かな』と見給ふに大方の世の定めなさもおぼしつゞけら  
れて泪のほろほろとこぼれぬるを今日は言忌すべき日  
をおしのごひ給ひて

「静かに思ひて歎くに堪へたり」とうちずじ給ふ五十八  
を十とりすてたる御齡なれど末になりぬる心地し給ひて  
いと物あはれに思さる「汝が父に」とも諫めまほしう思

しけむかし

柏木

の條であるが、源氏が原詩のまゝ、静思堪喜亦堪嗟と誦せ  
ず、堪喜をことさらに省いて堪嗟と吟誦したのは、不倫の  
子薫の出生を虚心に喜びえない心境だからであり、たゞ不  
倫故に命を縮めた青年貴公子柏木をあはれむ境地、しかし  
この事實は源氏を十年も老けこませる様な人の世の儚なさ  
となつて勿頑愚似汝爺と、せめては、若竹の薫の前途を祝  
い諫め度かつた、という様に、五十八翁にして子を設けた  
原詩作者の照れくさいけれども心底から湧き出る父親とし  
ての喜は、堪嗟に先行せざるをえないのであるが、堪喜亦  
堪嗟という複雑な心境を托した巧みな対偶の第一を、故意  
に欠く事によって、源氏の、人に秘めた心中の複雑な苦惱  
を形成したのである。

(吟)(三十九)(柏木)

天與善人吾不信。右將軍慕草初秋。

右大将藤保忠の死を悼んだ句

紀在昌

(四十)(幻)

耿耿残燈背壁影。蕭々暗雨打窓声。

上陽白髮人  
白

(吟)(四十一)(幻)

夕殿螢飛思悄然。孤燈挑盡未成眠



(四十二)(幻)

臨邛道士鴻都客。能以精誠致魂魄。為感君王展轉思。遂教方士殷勤覓。排雲馭氣奔如電。升天入地求之遍。

長恨歌  
白

(四十三)(幻)

蒹葭水暗螢知夜。楊柳風高雁送秋。

(作文大体正対の例)

朗詠集夏螢

(四十四)(幻)

黃壤詎知我。白頭徒念君。唯將老年淚。一洒故人文。

題故元少尹集後  
白

(四十五)(総角)

遺愛寺鐘欵枕聽。香炉峰雪撥簾看。

香炉峯下新卜山居  
草堂初成、偶題東壁  
白

(四十六)(同) 涅槃經

雪山童子「ななかばなる偈教へむ鬼もがな、ことつけて身もなげむ」

諸行無常。是生滅法。生滅々已。寂滅為樂。

(四十七)(寄木)

莫對三月明一思。中往時。損君顏色減君年。

贈  
白  
内

(吟)(四十八)(同)

不是花中偏愛菊。此花開後更無花。

朗詠菊花  
元  
楨

(四十九)(東屋)

「若有レ人聞是藥王菩薩本事品。能隨喜讚善者。是人

現世。口中常出青蓮花香。身毛孔中常出牛頭栴檀之香」

法華經藥王品

「藥王品などにも取りわきて宣へる牛頭栴檀とかや、おどろおどろしきものの名なれどまづ彼の殿の近く振舞ひ給へば佛はまことし給ひけりところぞ覺ゆれ」

(吟)(五十)(同)

班女閨中秋扇色。楚王台上夜琴声。

朗詠上 冬、雪

(五十一)(躑躅)

人非木石皆有情。不如不逢傾城色。

白 李夫人

(五十二)(同)

顧左右前後。粉色如土。

長恨歌伝

(吟)(五十三)(同)

大底四時心總苦。就中斷腸是秋天。

白 暮立

(詞)(五十四)(同)

故々將織手。時々弄小緒。耳聞猶氣絶。眼見若為憐。

遊仙窟、張文成

(五十五)(同)

崔季珪之小妹容貌似舅。潘安仁之外甥。氣調如兄。

遊仙窟

(五十六)(手習)

松声入夜琴。

季嶠百詠

(詞)(五十七)(同)

陵園妾陵園妾。顔色如花。命如葉。命如葉薄。將如

白 陵園妾

(詞)(五十八)(同)

松門到曉月徘徊。柏城盡日風蕭瑟。

白 陵園妾

(五十九)(夢浮稿)

若善男子善女人。發阿耨多羅三藐三菩提心。一日一夜出家修道。二百万劫不墮惡趣。

心地觀經

右の例中、光源氏或は他の人物に典型的な対偶をもつ原詩句を生のまま吟詠させ、その情趣に浸らしめた場合が十九例にも及んでいる。殊に浪漫的な情趣の高いものがあり形成しようと狙った須磨卷では五例にも及んでこれを用いたのである。会話の中や地の文に用いて原詩の情趣をそのまま、或はふえんして源氏物語世界の雰囲気を創りあげているのであるが、問題はここから出発するのである。この事実は、実は軽忽に単なる「漢詩文の引用」といった取り扱い方ですまされてはならなかったのである。

(五)

さて、愈々、上掲日本の和歌髓脳類の母胎となった中国の詩学、紫式部の父為時が、「寒夜」も苦学し、体得した成果を愛する子弟に教えた——（式部日記等より推察すれば紫式部は几帳ごしに熱心に傍聴していたと想われる）——中国の詩、及び詩学（史・子・はここではふれない）——ひいては本朝の詩髓脳類——その為に紫式部は白氏文集をはじめ、唐代著名詩人の詩句を暗んじ、源氏物語中に採り入れて源氏世界を形成したのであるが、その紫式部が最も傾倒した白氏文集等々唐詩の作家達が依拠した中国の詩学・詩論について、ことにその対偶論を少しく注目してみよう。とは、前述したように、詩の対偶は、華麗莊重であり、源氏物語世界の雰囲気を造形する上に重要な役割を果すものであったが、実はそれだけではないのである。以下みてゆく詩の精緻な対偶論は、中国の詩に巧に実践され、これに本朝詩人らも倣ったが、詩の世界に陶醉した才媛紫式部の脳裏に異常に深く刻みこまれて、或る人生観というか、世界観ともいえようか、そういうものにまで到達しているからである。次いで、それが、東洋にあって殊に中国にあって、そうであり、西洋においても違った様式ではあるが、そうである事について論及してゆき、最後に（八）源氏物語世界の対偶律の実体を詳細に検して稿を終る予定である。

る。

中国詩論の代表的なるもの（唐代迄）

魏文帝 典論○ 詩格 現在書目録にあるもの○印

晋陸機 文賦

晋摯虞 文章流別志論

東晋李充 翰林論

宋王微

宋顔延 庭誥

宋李淑 詩苑類格

齊劉勰 文心彫龍○

梁任昉 文章緣起

梁周顒 四声切韻

梁沈約 四声譜

梁鍾嶸 詩品○

元兢 詩髓脳

上官儀 筆札華梁

唐王昌齡 詩格 詩中密旨

积皎然 詩式 詩議

崔融 唐朝新定詩格

本朝詩論書

空海 文鏡秘府論 文筆眼心抄

源順 作文大体

中御門宗忠 作文大体

文心彫龍(現在書目録 雜家)によれば

造化自然の造形が支体必双であり、従つて心に文辞を生じて、そこに自ら対が生じてくるものであると論じ、対偶の存在を自然、必然のものであるとの前提にたつて、その重要性を認めたのである。麗辞(駢儷体の文辞)の章にあっては四種の対をあげて論じた。即ち、

言対

事対

反对

正対

である。

文心彫龍 麗辞三十五

造化賦形、支体必双、神理為用、事不孤立、夫心生文

辞、運裁百慮、高下相須、自然成対、……

故麗辞体、凡有四対。言対為易、事対為難、反对為優、

正対為劣。言対者、双比空辞者也、事対者、並舉人驗者也、

反对者、理殊趣合者也、正対者、事異義同者也。長卿上林

賦云、修容乎礼園、翺翺乎書圃、此言対之類也。

宋玉賦神女云、毛嬙鄼ギルモ袂、不トスルニ足フモ程バ式スレ、西施掩フモ面バ比スレ

之無ニ色シ 此事対之類也。仲宣登楼賦、云 鍾儀幽而楚奏シ

莊烏顯レ而越吟ス、此反对之類也。孟陽七哀云、漢祖想ニ粉榆一、

光武思ニ白水一、此正対之類也。凡偶辞胸臆 言対所以為

易也。徵人之学、事対所以為難也。幽顯同志、反对所以為

優也。並貴共心、正対所以為劣也。又以事対、各有反正、

指類而求 万條自昭然矣。

張華詩稱、「遊雁比翼翔、歸鴻知接レ翻」、劉琨詩言元在、詩字

「宣尼悲ニ獲麟一、西狩泣ニ孔邱一」、若レ斯重出、即対句之

駢枝也。

是以言対為美、貴在精巧、事対所先、務在允当、若兩事

相配、而優劣不均、是驥在左驂、騶為右服也、若夫事或孤

立、莫與相偶、是藁之一足、跨イ蹕蹕而行也、若氣無奇類、文

乏異采、碌碌麗辞、則昏睡耳目、必使理圓事密、聯璧其章、

迭用奇偶、節以雜佩、乃其貴耳、類此而思、理自見也。

贊曰 体植コト必兩 辞動有レ配 左提右挈 精味兼載 炳

爍ツラ聯ネ華ヲ 鏡静含レ態ヲ 玉潤双流 如ニ彼一珣珣、

註(1)

さて乃で麗辞の体に四つの対法がある。

言対はたやすく、事対はむつかしい。

反対は優り、正対は劣る。

言対とはたゞ空なる辞を対するもの。

事対とは故事を並べて対するもの。

反対とはすぢみちは逆だが、趣きは一致するもの。

正対とは事柄は違ふが意義の全く同じきもの。

司馬相如上林の賦の「修容平礼園」羽翔平書圃は言対の類。

宋玉神女の賦の「毛嬙鄒袂不足程式」西施掩面比之無色は事対の類。

王粲登樓の賦の「鍾儀幽而楚奏。莊鳥顛而越吟」は反対の類。

孟陽の七哀の「漢祖想粉榆」。光武思百水」は正対の類である。

凡そ言対といふのは、たゞ胸にわく言葉を対にしてゆけばよいので作り易く、事対は学問を必要とするのでむづかしい。反対は幽と顛の如く逆な立場を言つて而もその趣旨を一にさせるから優れてをり、正対はたゞ同じ意味の相似たことを並べるのだから劣れりとする。

張華の詩に「遊雁比翼翔。歸鴻知接鴈鴈もはね」とあり、劉琨の詩に「宣尼悲獲麟。西狩泣孔邱」宣尼孔丘何れも孔子のこととあるが、このやうに全く同じことを重ねて云ふのは、対句に於ける駢拇枝指である。

乃で言対の美しいのはその対法の精巧さにあり、事対に大切なのは二つの事柄がつとめてよく相当することに在る。若し二つの

事を並べて、その優劣が均しからぬときは、恰も駿馬を左に蹇け、驚馬を右に服けるやうなものだ。若し事が孤立して、相偶するものがないならば、これは一本足の夔（という獣）がびつこを引いて行くやうなものだ。又もし文の氣韻も文采も平々凡々で、たゞ碌々として対句を並べて行つたなら、徒らに睡気を催すばかりである。必ずや事理缺くところなく、その章を並べかがやかし、奇偶たがひに用ひて、時に散語（対句でないもの）を以て調節して行つたなら、それでこそはじめて貴いのである。之を推して考へてゆけば、道理は自ら明らかにならう。賛に曰く。

体植つこと必ず両。辭動けば配有り。左に提げ右に挈へ、精味兼ね載す。炳煥華を聯ね、鏡静かにして熊を含む。玉の潤ひの雙び流るゝこと、彼の珩珮の如くせん。

（傍線筆者）

（文学研究四十七輯P28—P29）  
文心彫龍（五）目加田誠

文鏡秘府論は、

余覽沈陸王元等詩格式等 出沒不同 今并其同者一撰

其異者一 都有二十九種對

と記すところよりすれば、中国詩格類の集大成ともみることが出来る。即ち、右六種對出元鏡髓腦、右八種出皎公詩儀、右三種出崔氏唐朝新定詩格によれば、空海披見の釈皎然詩議、元鏡詩髓腦、崔融唐朝詩格の面影が察せられるわけである。唐朝の官吏登用試験作文の教科書的存在

であったこれらの詩格式は、唐朝インテリの間流布していたものであり、従って本朝漢文芸作家圈の間にも作文上の聖典であったのである。それらを読破した空海によって秘府論、眼心抄が著述された。文鏡秘府論考研究篇下  
小西甚一氏著167頁によって、秘府論の東卷二十九対の典拠は文筆式、詩髓脳・詩議・更に筆札華梁・唐朝新定詩格にあり、北卷論対屬の原典は王召齡の詩格ではなく「上官儀説が基礎となつたらしく思はれる」「しかも上官儀説(抛・筆札華梁)の直接引用でなくおそらく「文筆式」を通じての間接引用であつたらうと思ふ……」と明らかにされ、空海の詩論は全く中国詩論の踏襲である事がわかつた。

(文鏡秘府論 東)

空海は文鏡秘府論において対を論じて

或曰。文詞妍麗良由二対属之能一。筆札雄通寔安施之巧。  
 若言不レ対。語必徒申。韻而不レ切煩詞枉費。元氏云。  
 易曰。水流レ濕火就レ慘、雲從レ龍、風從レ虎。書曰。満招レ損謙受レ益。此皆聖作切対之例也。況乎庸才凡調而対。而不レ求レ切哉。余覽ニ沈陸王元等詩格式等一、出沒不レ同。今并ニ其同者ニ撰ニ其異者一。都有ニ二十九種対。云々其賦対者。合ニ彼重字双声疊韻三類一。与レ此一レ名。或疊韻双声各開ニ一対一。畧ニ之賦体一。或以ニ重字一屬ニ聯綿対一。今者開合俱舉存ニ彼三名。

二十九種の対を挙げてゐる。即ち

- 一曰的名対亦名ニ正名対一
- 二曰隔句対亦名正対

- 三曰双擬対
- 四曰聯綿対
- 五曰互成対
- 六曰異類対
- 七曰賦体対
- 八曰双声対
- 九曰疊韻対
- 十曰廻文対
- 十一曰意体

右十一種古人同出ニ斯対一

- 十二曰平対
- 十三曰奇体
- 十四曰同対
- 十五曰字対
- 十六曰声対
- 十七曰側対

右六種対出ニ元統髓體一

- 十八曰隣近対
- 十九曰交絡体
- 廿曰当句体
- 廿一日含境対
- 廿二曰背体対
- 廿三曰偏体
- 廿四曰双虚実体
- 廿五曰假体

右八種対出ニ皎公詩議一

- 廿六曰切側対
- 廿七日双声側対
- 廿八曰疊韻側対

右三種出ニ崔氏唐朝新定詩格一

- 廿九曰摠不對対

これを説明して

第一的名対

天地 日月 好悪 去来 轻重 浮沈 長短 進退 方  
円 大小 明暗 老少 兇儻 俯仰 壯弱 往還 清濁  
南北 東西

詩曰

東圃青梅發 西園綠草開 砌下花徐去 階前絮緩來

第二隔句対

第一句と第三句と対し第二句と第四句と対するもの。詩  
に曰く

昨夜越溪難 含悲赴上蘭 今朝逾嶺易 抱笑入長安

長安

相思復相憶 夜夜淚沾衣 空悲亦空歎 朝朝君未歸

第三双擬対、とは一句の中に論ずるところ、たとへば第一

の字が秋なれば第三の字も亦秋、(双擬対者、一句之中、

論所假令第一字是秋、第三字是亦秋、二秋擬第二字、下  
句亦然。) 詩に曰く

夏暑夏不衰 秋陰秋未歸 炎至炎難却 涼消涼易

追

秋曰第一句中両夏字擬一暑字。第二句中両秋字擬一陰  
字。第三句中両炎字擬一至字。第四中両涼字擬一消

字……

第四聯綿体 聯綿体者不相絶也一句之中第二字第三字

是重字…… 詩曰

看山已峻 望水水仍濤 聽蟬蟬響急 思郷別情

第五互成対 互成対者天与地对 日与月対 麟与鳳対

金与銀対 台与殿対 楼与榭対 両字若上下句安名ニ的

名対ニ若両字一處用之是用之名ニ互成対ニ言互相成也

詩曰

天地心間静 日月眼中明 麟鳳千年貴 金銀一代榮

秋曰第一句之中天地一處 第二句之中日月一處……

第六異類対 異類対者上句安天下句安山上句安雲下

句安微上句安鳥下句安花上句安風下句安樹……

詩曰

天清白雲外 山峻紫微中 鳥飛髓去影 花落逐搖風

秋曰、上句安天下句安山、天山非敵体、白雲紫微亦

非敵体、第三句安鳥第四句安花、鳥花非敵体、去

影揺風亦非敵体、如此之類名為異類対 又曰

風織池間字 虫穿葉上文

秋曰、風虫非類而附対是同、池葉殊流而寄巧帰……

第七賦体对 賦体对者或句重字、或句首疊韻、或句腹疊

韻、或句首双声、或句腹双声、如レ此之類名為二賦体对一、

似二賦之形体一、故名二賦体对一 詩曰

句首重字 裊裊樹驚風 麗麗雲蔽月

皎皎夜蟬鳴 朧朧曉光發

句腹重字 漢月朝朝暗 胡風夜々寒

第八双声对 詩曰

秋声香ニ佳菊一 春風馥ニ麗蘭一

積曰佳菊双声係ニ之上語之尾一 麗蘭疊韻陳ニ陳ニ諸下句之

末……

第九疊韻对 詩曰

放暢千般意 逍遙一箇心……

第十廻文对 詩曰

情親由レ得意 得意遂情親 新情終会会 故レ故亦經レ

新 積曰双情著ニ於初九一、兩親繼ニ於十二一、又頭三頭新尾故一、

還標ニ上下之故新一、列レ字也久、施レ之已周、廻又更用重

申ニ文義……

第十一意对 詩曰

歲暮望ニ空房一 涼風起ニ坐隅一 寢興日已寒 白露生ニ庭

蕪一

積曰歲暮涼風非ニ是屬对一、寢興白露罕レ得ニ相酬一、事意

相因文理無レ爽、故曰ニ意对ニ耳

第十二平对 平对者若ニ青山綠水一、此平常之对、故曰一

平对ニ也

第十三奇对 奇对者、若ニ馬頰河熊耳山一、此馬熊是獸名、

頰耳是形名、既非ニ平常一、是為ニ奇对一……

第十四同对 同对者、若ニ大谷広陵薄雲輕霧一、此大与レ

広薄与レ輕、其類是同故謂ニ同对一。同類对者、雲霧星月、

花葉風煙、霜雪酒醪、東西南北、青黃赤白、丹素朱紫、

霄夜朝旦、山岳江河、台殿宮堂、車馬途路

第十五字对 或曰、字对者若ニ桂楫荷戈一 荷是負之義

以ニ其字草名ニ故字与桂為レ对、不レ用レ对但取レ字為レ对也、

或曰、字对者、謂ニ義別字对一 詩曰

山榭架ニ寒霧一 池篠韻ニ涼颺一

山榭即頂也、池篠傍レ池竹也此義別字对

山榭即頂也、池篠傍レ池竹也此義別字对

山榭即頂也、池篠傍レ池竹也此義別字对

山榭即頂也、池篠傍レ池竹也此義別字对



第十六声对 或曰、声对者若<sub>シ</sub>曉路秋霜<sub>一</sub>、路是道路与<sub>レ</sub>霜非<sub>レ</sub>对、以<sub>ニ</sub>其与<sub>レ</sub>露同<sub>一</sub>声故、或曰、声对者謂<sub>レ</sub>字義俱別<sub>ニ</sub>声作<sub>レ</sub>对是<sub>ナリト</sub>

第十七側对 元氏曰、側对者、若<sub>シ</sub>馮翊龍首<sub>一</sub>此為<sub>ニ</sub>馮字<sub>一</sub>半辺有<sub>レ</sub>馬、与<sub>レ</sub>龍為对、翊字半辺有<sub>レ</sub>羽与<sub>レ</sub>首為<sub>レ</sub>对……

第十八隣近对 詩曰

死生今忽異 歛娛意不同 又曰

寒雲輕重色 秋水去來波

上是義下是正名此也、对大体似<sub>ニ</sub>的名<sub>一</sub>、的名窄隣近寬

第十九交絡对 賦詩曰

出入三代<sub>一</sub> 五有余載

或曰、此中余屬<sub>ニ</sub>於載<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>偶<sub>ニ</sub>出入<sub>一</sub>古人但四字四義皆成<sub>レ</sub>对故偏举<sub>レ</sub>以例焉

第二十当句对 賦詩曰 薰歇<sub>一</sub> 光沈<sub>一</sub>

第二十一含境对 詩曰、悠遠<sub>一</sub> 寂寥<sub>一</sub>

第二十二背体对 詩曰、進<sub>レ</sub>德智所<sub>レ</sub>拙 退<sub>レ</sub>耕力不<sub>レ</sub>任

第二十三偏对 詩曰、肅々馬鳴 悠々旃旌

第二十四对双虚实对 詩曰、故人雲雨散 空山來往疎

第二十五假对 詩曰、不<sub>レ</sub>獻<sub>ニ</sub>胸中策<sub>一</sub>、空歸海上山

第二十六切側对 詩曰、浮鐘<sub>一</sub> 飛鏡<sub>一</sub>

第二十七双声側对 ……字義別双声來对<sub>一</sub> 是

詩曰、花明<sub>ニ</sub>金谷樹<sub>一</sub> 葉映<sub>ニ</sub>首山薇<sub>一</sub>

字義別双声側对

第二十八疊韻側对 ……字義別、声名<sub>ニ</sub>疊韻对<sub>一</sub>是

詩曰、平生披<sub>ニ</sub>韜帳<sub>一</sub> 窈窕步花庭

第二十九摠不对 如下平生少年日、分<sub>レ</sub>手易<sub>ニ</sub>前期<sub>一</sub>、及爾

同衰暮、非<sub>ニ</sub>復別離時<sub>一</sub>、勿<sub>レ</sub>言<sub>ニ</sub>一罇酒<sub>一</sub>、明日難<sub>ニ</sub>共持<sub>一</sub>、

夢中不<sub>レ</sub>識<sub>レ</sub>路、何以慰<sub>ニ</sub>中相思<sub>一</sub>

此摠不对之詩、如此作者最為<sub>ニ</sub>佳妙<sub>一</sub>、夫屬对法非<sub>レ</sub>真風

花竹木用<sub>レ</sub>事而已、若<sub>シ</sub>双声即双声对、疊韻即疊韻对

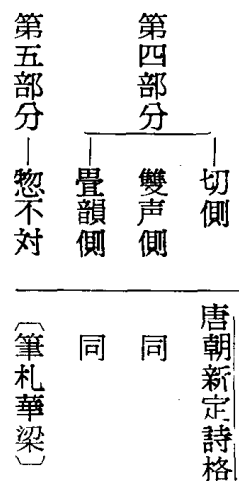
二十九对の原拠（小西氏）

○秘府略に明言せるもの

互成	聯綿	雙擬	隔句	的名	文筆式
同	同	同	同	同	同
	筆札華梁	筆札華梁		筆札華梁	詩議
	詩議		詩議		詩髓腦
同					

第三部分										第二部分									
假	雙虛異	偏	背体	含境	当句	交絡	隣近	側	声	字	同	奇	平	意	廻文	疊韻	雙声	賦体	異類
		同	同	同	同	同	詩議	同	同	同	同	同	詩髓腦	文筆式	同	同	同	同	同
同	詩議															筆札華梁	筆札華梁		
								同	同	唐朝新定詩格									同
																			詩髓腦

同 唐朝新定詩格



作文大体（類從本）

第六字對

凡詩有<sub>二</sub>八對<sub>一</sub>、其中常可<sub>レ</sub>用者、色對、數對、声對是也。色對者上句用<sub>二</sub>丹青<sub>一</sub>、下句用<sub>二</sub>黑白<sub>一</sub>之類等是也。數對者上句用<sub>二</sub>三千<sub>一</sub>、下句用<sub>二</sub>一万<sub>一</sub>之類等是也。声對者上句用<sub>二</sub>仙字<sub>一</sub>、下句用<sub>二</sub>万字<sub>一</sub>之類等是也。夫仙字声涉<sub>レ</sub>千。故与<sub>二</sub>万字<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>對耳。其外風雲草木。魚虫禽獸。年月日時。天地明暗。貴賤上下。以<sub>二</sub>其名<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>對者也、又色對之中、以<sub>二</sub>烏代<sub>二</sub>黑<sub>一</sub>。以<sub>二</sub>雪代<sub>二</sub>白<sub>一</sub>。數對之中。以<sub>二</sub>双准<sub>二</sub>一。以<sub>二</sub>孤准<sub>二</sub>一。等類是也。発句落句強不<sub>レ</sub>求<sub>レ</sub>對。音可<sub>レ</sub>盡<sub>レ</sub>理。是絶句体也。四韻之胸腰句必可<sub>レ</sub>求<sub>二</sub>對字<sub>一</sub>。長韻可<sub>レ</sub>准<sub>二</sub>知之<sub>一</sub>。今案<sub>二</sub>諸集<sub>一</sub>。絶句之中或発句或落句有<sub>二</sub>對字<sub>一</sub>者。是邂逅也。

(六)

東洋において、就中、中国にあっては、對偶意識が文芸上の一様式を形成し、定着して、二千年を閲している。即ち、對句——詩文の句に對偶があるという特殊な様式——こそは、漢詩文の顯著な特徴なのである。文章では

書経堯典

九族既睦 平三章百姓一 百姓昭明 協三和万邦一

詩では

書経益稷

股肱喜哉 元首起 百工熙哉

に始まるといわれている。易経、老子、詩経等、殊に詩経にはしばしばみられるところである。後漢以後、婉麗を好む風潮につれて、種々の対偶が用いられるにいたり、六朝には益々盛行した。遂に文芸論として文心彫龍の形成にまで到達した次第である。詩においては唐代に律詩の一体は必ず対句に用いたものである。文章においては所謂四六駢麗文が南北朝以来流行した。明朝以後「八股文」と称する文体が官吏登用試験論文として採用された。

明末清初の李笠翁の戯曲においては、二人主人公で到底せしめるといふ珍しいプロットが出現した。

清朝の小説曹雪芹の紅樓夢は、中国文芸史上代表的長篇恋愛小説である事論、をまつまでもないが、これが、主人公に真偽二人の宝玉を設定している事は軽忽に看過出来な

いと思ふのである。建築においても左右対照、調度——対簾の如きものいたるまで——である。前述、「対」の説明に依ってわかる如く、「天地」「日月」のごとき語彙よりはじめて、中国人の生活を支配する対偶意識というか、生活感情の中に対

偶観とでもいうものが、いかに根深く、巾広い底辺をしめているかが察知されるのである。

さて、これは中国のみであろうか。東洋のインドは、佛典を通して観察し、(別稿にゆずる)日本も稿を改める事とし、西洋にあつて、個人の意識の底に、それが現れた芸術作品、それらを暗々裡に律する芸術論の中に、こゝでいう対偶律に類するものを覓めてみようと思う。次回は、此の(七)の操作をへて、愈々(八)で、源氏物語を律する対偶律の実態をみる事とする。

註(1)

李漁(笠翁) 明末清初の人 1661~1680? の作品中、十種曲

憐香伴

二人の仲よい女性 勝気な女性とおとなしい女性が一人の男の妻となる

風箏誤

道楽者の公子とその家に寄寓する秀才

醜い姉

美しい妹

意中縁

董其昌 と陳眉公 と二人の才媛

屢中樓

主人公柳生と張生 相手洞庭の龍女と東海の龍女

鳳求凰

一人の男性をめぐる三人の女、実は二人の女の張りあ

奈何天

醜い鈍才が美貌の才子とかわる

比目魚

立役になった書生と地方の金持

玉搔頭

玉搔頭をもらった女とひろった瓜二つの姫

巧団円

老夫妻と息子夫婦

慎鸞交

二組の恋 どこまでもかたい立派な恋仲 軽薄な才子で美人をくるしめる息子

これについて、「李笠翁の戯曲」目加田誠（文学研究第三十九輯）94 P

「ただ彼の戯曲ですぐ気づくことは、主人公に二組の男女を設けることが多いことである。慎鸞交、風箏誤、意中縁、屜中楼然りである。

ここに実は中国の相對趣味というものを持ち出すのはやや唐突であろうか。対称を好むことはあらゆる方面に現われる中国人の氣質であるが、ことに之が試験の文章の八股文となり、一つの題目を対（股）に開いては展べ、最後に結句に締めくくる。中国の相對趣味、ことに八股文の趣きが李笠翁の戯曲に現われていると見ることが興味深い。更に又、たとへば玉搔頭の如き、男は正徳帝一人で実はこの天子と田舎の美人との身分を越えた深い相思をつきつめて行けば面白いのに、わざわざ玉搔頭を拾つた今一人の、姿も顔も瓜二つといふ美人を出して、之と並んで宮中に入れる。之はいはば余計なこと、そっくり同じ女性を左右に並べる必要はどこにあるか。やはり左右に二つ並べたがる趣味のあらわれと解釈せざるを得ぬのではないかと思ふ。……李笠翁の戯曲は全く中国人の趣味の中に、又中国劇の特質の上に立つて彼の特長を伸ばして劇として一段の進歩を示したものである事をのべ、之によつて李笠翁の戯曲の特色をそこに又中国劇の性格といふもの、又文芸に現れた中国人近作の趣味といふもの一端をも暗示するところが出来るかと思ふ。」

註(2) 紅樓夢 八十回(曹雪芹)

乾隆二十九年

(西1764年)

続篇 四十回(高鶚)

乾隆六十年

(1795年)

主人公賈宝玉の外に容貌、性格、家庭環境（大家の子息で祖母に溺愛されている）と殆ど全く同じく設定された甄宝玉があり、賈家と甄家は昔からの親戚である。註「全く同じ人間が二人居つて一人は甄（真）、一人は賈（仮）ということになる」 「甄宝玉を真の作者、賈宝玉をその仮託の姿とみるのは真の文字から一応考えられよう」しかし自伝的小説といわれ、作者を宝玉として形成するにしても何も全く同じ二人物を設定する必要はないわけである。註「畢竟真は真に非ず、仮は仮に非ず、まことの「真」とは作者に言せれば甄宝玉でもなく賈宝玉でもなく、或はそのどちらでもあり、どちらでもない。甄賈（真仮）を超えた世界にあると言うのであろう」

続篇の方は甄宝玉を立身出世主義の男にしたて、賈宝玉は科学にパスしたが俗縁をたつて仏界に入る。と違つたかれにしたてた。

註1、二人の宝玉 文学研究七十五輯 目加田誠